



司会：自分の中ではこの柔道場は「古い」「古い」というイメージでした。私が入学した頃に剣道場が出来たばかりで、柔道場だけ建て直してもらえなかったという思いがありました。

屯倉：その後も柔道場とトレーニング場を新たに作る計画も持ち上がり、案を作ったこともあるが、結局その案は消えた。

司会：いろいろいきさつはありながらこのまま残り、今となってみればよかったですね。新しい柔道場だったらこんなに懐かしさはなかったでしょう。

野崎：視覚による記憶というのでしょうか。来て見て記憶が鮮明に蘇りました。確か天井に、随分昔の先輩が残したというモスラがいましたよね？

司会：20年ぶりに柔道場を訪れた感想を聞かせてください。

南：懐かしさと感じると同時に、こんなに天井が高かったんだなと思いました。

山田：初めから古かったので、古くなった感じはしなくて、そのままする感じですね。

坂田：柔道場は変わっていませんね、みなさんは変わっていませんね、(一同笑)。

時信：当時は古いものに対してありがたみがわからなかったのですが、毎日このような貴重な場所を練習していたのだなと改めて思いました。

土田：匂いと風を感じて、高校時代にタイムスリップしたように感じました。

中司：改めて朝日の柔道部に入って光栄に思いました。

全員：こういう機会を与えてくださって感謝しています。屯倉先生に怒られながら教えていただいたのが、ついこの前のように思い出します。

難波：高校時代の記憶がほとんど忘れ去られていたのですが、今日卒業以来初めて来て、随分思い出したことがあり懐かしかったです。

藤原：当時のまま残っていてありがたいですね。やはり記憶の引き金になります。思い出したこともいろいろあります。

司会：思い出したことは？

藤原：悪いことなので言いたくないですが、蛍光灯を割っちゃったりいろいろと…

野崎：視覚による記憶というのでしょうか。来て見て記憶が鮮明に蘇りました。確か天井に、随分昔の先輩が残したというモスラがいましたよね？

柔道は、勝負云々よりも、相手思いやり、礼節を重んじる国技。後輩がいないのが非常に残念です。早期の復活を望んでいます。

○あながき

大きな銀杏の木々が覆われた柔道場が、まるで皆を優しく迎え入れるかのように座談会は始まりました。当日は真夏の日差しが照りつける厳しい暑さでしたが、時折涼しい風が通り抜け、徐々に記憶が蘇り、昨日のことのように当時の思い出を語る皆の表情は青春そのもので、これも柔道場のおかげなのかなと思いました。

屯倉先生を中心に、車座になって話をした後輩をみると、男女仲良く練習に励んだ当時の柔道部の雰囲気少しわかった気がしました。子ども連れの後輩もいて、柔道場の片隅でじゃれ合っている姿をみて、大きくなった朝日高で柔道やって欲しいなと思ひ、思わず「お母さんに受け身を教わってほしい」と言ってしまうました。(吉田)

録財念  
物文化記  
造形登録  
有登録

東西書庫の思い出

昭和28年卒 片山峰子

(昭和28.9.58.3 司書)

書庫を初めて見たのは六十数年前である。六高の正門と書庫は小学校の通路にあり、柔道場やプールは中学校の通学路にあった。

広い校庭には公孫樹や桜をはじめ見事な樹木があり、学校を取り巻く石堀の上には白いカラタチの花が咲いていた。公孫樹並木と調和した三階建ての洋館は格調高く、憧れをもって見上げていたものだ。

周囲は田園地帯で、農家が地蔵川沿いに点在していた。敗戦間近の岡山空襲の時、国富のわが家から一際高く燃え上がる炎を見た。それが六高だと知らされた。なぜか私は毎日見えていた三階建ての洋館を思い浮かべた。それが図書館に隣接した書庫だと知ったのは戦後である。しかも書庫は焼け残ったのであった。

戦後の学制改革で六高が岡山大学となつてこの地を去り、朝日高校が城跡の一中校舎から移ってきた。図書部に入っていた私は、一年先輩の図書部員が書庫へ運び入れていた本を借りて毎日通つたものだ。

卒業後、母校の図書館司書になったのは、こんな思い出が心に強く残っていたからだ。書庫の入口には頑丈な鉄の扉と厚い土蔵の引き戸があり、どちらにも大きな門がかかっている。六高時代から引き続き用務の仕事をしてきた浦波さんが大切なことを教えてくださった。外から門をかけられると、鉄格子の書庫から出ることができない。

そんな時のためにつだけ鉄格子を外すことができる場所を教えてくださいました。それは非常にうれしかったけれど、幸い、それを利用しなければならぬことはなかった。

初めのうち、本は書庫にしかないの生徒は自由に入れた。そのため困ったこともあった。一番忘れられないのは原田校長から呼びつけられたことである。近くの農家の人から電話があり、書庫の二階へ夜中に人が立っていたというのである。調べてみると生徒のいたずらだった。二階、三階は物置になっていて疎閑させていた絵画や、県教委、教育センターの保存資料などが置かれていた。

その中に当時、教頭だった高林先生の肖像画があり、二階の北の窓にはめこんでいたのである。当時美術の先生だった河野先生の作品だったらしい。実物大の絵は農家の人に本物と思わせたのだろう。

中に閉じこめられた少年が鉄格子のない二階の窓から青桐を掴み、側の藤棚に飛び降りて脱出したと得意げに教えてくれた。私は胸を撫で下ろしたが先生には報告できなかった。

若い日のいろいろな思い出を秘めた東西書庫が、国の有形登録文化財に指定されたそう。

私のふるさとが蘇つたように思えてならない。ここで過ごした三十年は当時も今も私の宝だ。



昭和30年頃、後方が西書庫。藤棚と青桐がまだ若く花が咲いていなかった卒業生が尋ねてきて写してくれた。



昭和36年(1961)の卒業アルバムから

図書館に開館の札高く掲げたり勢い入りくるどの顔も皆日に一度鉄格子の書庫に入りゆきて静もる背文字確め歩く感じやすき少女が囲むわがめぐり言葉細やかに選りて使ひぬ整理終へし書架に赤赤と射す西日いま心地よき疲れひろがる天窓よりわずかに見ゆる空の色移ろひてまた冬のきたりぬ新しく匂う書物に押しゆく朱印わが生の証ともして眼まぐるしく吾を追いつく少年ら皆新しき自転車に乗る